

10/10 Sat.

第122回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MINATO MIRAI HOLIDAY POPULAR SERIES, No.122 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

ベートーヴェン
BEETHOVEN

[休憩]
[Intermission]

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

井上道義 -p.5
MICHIO INOUE
仲道郁代 -p.8
IKUYO NAKAMICHI
小森谷 巧
TAKUMI KOMORIYA

ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73〈皇帝〉
[約38分] -p.10
Piano Concerto No. 5 in E flat major, op. 73 "Emperor"
I. Allegro
II. Adagio un poco mosso
III. Rondo : Allegro

交響曲 第8番 ト長調 作品88 [約37分] -p.11
Symphony No. 8 in G major, op. 88
I. Allegro con brio
II. Adagio
III. Allegretto grazioso
IV. Allegro ma non troppo

※当初の発表から出演者が一部変更されました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
神奈川県文化芸術活動再開加速化事業補助金
協力：横浜みなとみらいホール

10/16 Fri.

第602回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.602 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ヴァイオリン
Violin
コンサートマスター
Concertmaster

レスピーギ
RESPIGHI

プロコフィエフ
PROKOFIEV

[休憩]
[Intermission]

レーガー
REGER

秋山和慶 -p.6
KAZUYOSHI AKIYAMA
神尾真由子 -p.8
MAYUKO KAMIO
長原幸太
KOTA NAGAHARA

組曲〈鳥〉 [約18分] -p.12
Gli uccelli
I. 前奏曲
II. 鳩
III. めんどり
IV. 夜鶯
V. カッコウ

ヴァイオリン協奏曲 第1番 ニ長調 作品19
[約22分] -p.13
Violin Concerto No. 1 in D major, op. 19
I. Andantino
II. Scherzo : Vivacissimo
III. Moderato — Allegro moderato

モーツァルトの主題による変奏曲とフーガ
作品132 [約35分] -p.14
Variations and Fugue on a Theme of Mozart, op. 132

※当初の発表から出演者と曲目が変更されました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック
令和2年度（第75回）文化庁芸術祭参加公演
※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

10/21 Wed.

非破壊検査 Presents 第27回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT IN OSAKA, No.27, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd / Festival Hall 19:00

10/24 Sat.

第231回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.231 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

10/25 Sun.

第231回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.231 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Special Guest Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

グリンカ
GLINKA

ラフマニノフ
RACHMANINOFF

[休憩]
[Intermission]

ベートーヴェン
BEETHOVEN

小林研一郎 (特別客演指揮者) -p.7

KEN-ICHIRO KOBAYASHI

河村尚子 -p.9

HISAKO KAWAMURA

小森谷 巧

TAKUMI KOMORIYA

歌劇〈ルスランとリュドミラ〉序曲 [約5分] -p.15

"Ruslan and Lyudmila" Overture

バガニーニの主題による狂詩曲 作品43 [約25分] -p.16

Rhapsody on a Theme of Paganini, op.43

交響曲 第3番 変ホ長調 作品55〈英雄〉 [約47分] -p.17

Symphony No.3 in E flat major, op. 55 "Eroica"

I. Allegro con brio

II. Marcia funebre : Adagio assai

III. Scherzo : Allegro vivace

IV. Finale : Allegro molto

※当初の発表から出演者と曲目が一部変更されました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

特別協賛：非破壊検査株式会社 (10/21)

助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)

文部科学省 独立行政法人日本芸術文化振興会 (10/24, 25)

共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 (10/24, 25)

協力：コジマ・コンサートマネジメント (10/21)

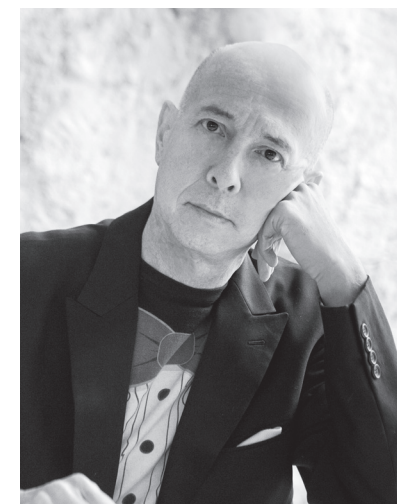
※10月21日公演では読売テレビによる収録が行われます。

指揮

井上道義

MICHIYOSHI INOUE, Conductor

“カリスマ”が振る 入魂のドヴォルザーク



©高木ゆりこ

斬新な発想力と豊かな音楽性を誇り、圧倒的なカリスマ性を持つ鬼才。これまで読響とは、ブルックナーやマーラーの演奏、オペラなどで共演を重ね数々の名演を生んできた。今回は、ベートーヴェンとドヴォルザークの二つの傑作を振り、会場を熱狂へと誘う。

1946年東京生まれ。桐朋学園大学卒業。71年グイド・カンテルリ指揮者コンクールに優勝した後、世界的な活躍を開始する。これまで、ニュージーランド国立響首席客演指揮者、新日本フィル音楽監督、京都市響音楽監督、大阪フィル首席指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督を歴任。また、シカゴ響、ハンブルク響、ミュンヘン・フィル、スカラ・フィル、レニングラード響、フランス国立管、ブダペスト祝祭管、KBS響、ベネズエラ・シモン・ボリバル響など世界一流のオーケストラへ登場している。

2007年、日露五つのオーケストラとともに「日露友好ショスタコーヴィチ交響曲全曲演奏プロジェクト」を実施し、音楽・企画の両面で大きな成功を収めた。14年4月、病に倒れるが、同年10月に復帰を遂げる。15年の全国共同制作オペラ〈フィガロの結婚〉(野田秀樹演出)、17年の大阪国際フェスティバル「バーンスタイン：ミサ」を総監督として率い成功へと導いた。19年にはオペラ〈ドン・ジョヴァンニ〉で総監督として既成概念にとらわれない舞台を作り、高く評価された。

渡邊暁雄基金特別賞、東燃ゼネラル音楽賞、大阪文化賞、大阪文化祭賞、音楽クリティック・クラブ賞など受賞多数。

10/10
みなとみらい

Maestro

10/16
定期

Maestro

指揮

秋山和慶

KAZUYOSHI AKIYAMA, Conductor

日本を代表する巨匠が 熟達のタクトを披露



豊かな音楽性と幅広いレパートリーを誇る巨匠が、約9年ぶりに読響《定期》に登場。レスピーギやレーガーなどの作品で熟達の腕を振るう。

1941年生まれ。桐朋学園大学卒業。64年から40年間にわたり東京響の音楽監督・常任指揮者を務めた。その間、トロント響副指揮者、アメリカ響音楽監督、バンクーバー響音楽監督（現・桂冠指揮者）、シラキウス響音楽監督、大阪フィル首席、札幌響首席、広島響首席、九州響首席を歴任。現在は、東京響桂冠指揮者、広島響終身名誉指揮者、九州響桂冠指揮者、中部フィル芸術監督・首席指揮者、日本センチュリー響ミュージックアドバイザーなど多くの任を務める。客演指揮者としてサンフランシスコ響、クリーヴランド管、ロサンゼルス・フィル、フィラデルフィア管、ニューヨーク・フィル、ボストン響、シカゴ響、ロイヤル・フィル、ケルン放送響、スイス・ロマンダ管、チューリヒ・トーンハレ管など世界各地の一流楽団と共演を重ねてきた。

また、シェーンベルク〈ヤコブの梯子^{はしご}〉、ヤナーチェク〈利口な女狐の物語〉〈カーチャ・カパノヴァ〉、ラッヘンマン〈マッチ売りの少女〉、アダムズ〈エル・ニーニョ〉など、日本初演を含む多彩な演目を取り上げるなど日本の音楽界をリードしてきた。サントリー音楽賞、芸術選奨文部大臣賞、大阪芸術賞、川崎市文化賞、広島市民賞など受賞多数。2001年に紫綬褒章を、11年には旭日小綬章を受章。14年度文化功労者に選ばれた。洗足学園音楽大学芸術監督・特別教授、京都市立芸術大学客員教授。

指揮

小林研一郎

（特別客演指揮者）

KEN-ICHIRO KOBAYASHI, Special Guest Conductor

炎のマエストロ 渾身のベートーヴェン



©読響

今年4月に80歳を迎え、ますます円熟味を深める世界的指揮者。生誕250年を迎えたベートーヴェンの〈英雄〉に熱い魂を込める。

1940年福島県いわき市出身。東京芸術大学作曲科および指揮科を卒業。74年第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位・特別賞を受賞。これまでハンガリー国立響の音楽総監督をはじめ、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など国内外の数々のオーケストラのポジションを歴任している。2002年5月の「プラハの春音楽祭」では、東洋人として初めて開幕コンサートに招かれ〈我が祖国〉全曲をチェコ・フィルと演奏し、絶賛された。ハンガリー政府よりリスト記念勲章、ハンガリー文化勲章、星付中十字勲章、ハンガリー文化大使の称号、そして20年3月には同国で最高位となるハンガリー国大十字功労勲章を授与された。11年、文化庁長官表彰。13年、旭日中綬章を受章。チェコ、オランダでも文化を通じた国際交流や社会貢献に寄与し、長年にわたり重責を担ってきた。

現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、群馬響ミュージック・アドバイザー、九州響名誉客演指揮者、東京芸術大学およびリスト音楽院（ハンガリー）名誉教授の任にあるほか、東京文化会館音楽監督、長野県芸術監督団の音楽監督、ローム ミュージック ファンデーションの評議員などを務めている。

録音では、14年4月から読響と取り組んだブラームスの交響曲全集が好評を博す。

10/21
大阪定期

10/24
土曜マチネー

10/25
日曜マチネー

Maestro

10/10
みなとみらい

Artist



©Kiyotaka Saito

ピアノ

仲道郁代

IKUYO NAKAMICHI, Piano

温かい音色と豊かな音楽性で人気、実力ともに日本を代表するピアニスト。国内外での数々の受賞を経て、1987年に本格的にデビュー。これまでに国内はもとより、ピッツバーグ響、バイエルン放送響、フィルハーモニア管、ドイツ・カンマーフィルなど海外のオーケストラとも共演。2018年より、ベートーヴェン没後200年の2027年に向けて「仲道郁代Road to 2027プロジェクト」をスタートさせ、リサイタルシリーズを展開中。

CDはレコード・アカデミー賞受賞CDを含む「仲道郁代ベートーヴェン集成〜ピアノ・ソナタ&協奏曲全集」など高い評価を得ている。著書に『ピアニストはおもしろい』（春秋社）など。桐朋学園大学教授、大阪音楽大学特任教授。読響とはこれまでにたびたび共演している。



©Marco Borggreve

ピアノ

河村尚子

HISAKO KAWAMURA, Piano

ドイツを拠点に国際的に活躍する本格派。兵庫県生まれ。ハノーファー国立音楽芸術大学在学中、ミュンヘン国際コンクール第2位入賞、クララ・ハスキル国際コンクール優勝で一躍世界の注目を浴びた。これまでに、テミルカーノフ、ルイーダ・ヤノフスキ、ピエロフラーヴェクらの指揮で、ウィーン響、バイエルン放送響、ベルリン放送響、チェコ・フィルなど一流楽団と共演している。文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞ほか、2020年には第32回ミュージック・ペンクラブ音楽賞独奏・独唱部門賞、第12回CDショップ大賞2020・クラシック賞、第51回サントリー音楽賞を受賞。19年秋公開の映画『蜜蜂と遠雷』では主役・栄伝亜夜のピアノ演奏を担当して話題となった。読響には09年に初登場し、共演を重ねている。

10/16
定期

Artist

2007年チャイコフスキー国際コンクールで優勝し、世界中の注目を浴びた実力派。これまで、国内の主要オーケストラはもとより、ロストロポーヴィチ、アルブレヒト、メータ、ロト、インバル、I.フィッシャーらの指揮でミュンヘン・フィル、南西ドイツ放送響、チューリヒ・トーンハレ管、バイエルン国立歌劇場管、BBC響など一流楽団と共演している。サン・モリッツ、コルマール、ヴェルビエなどの著名フェスティバルにも出演。また、ニューヨーク、フランクフルト、ミラノなど世界各地でリサイタルも多数。宗次コレクションよりストラディヴァリウス1731年製「ルビノフ」を貸与されている。録音ではRCAレーベルから「ロマンティック・ソナタ」などをリリース。読響には13歳で初登場して以来、共演を重ねている。



©Makoto Kamiya

ヴァイオリン

神尾真由子

MAYUKO KAMIO, Violin

10/21
大阪定期

10/24
土曜マチネー

10/25
日曜マチネー

Artist

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73〈皇帝〉

今年は、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）生誕250年の年。ピアノ協奏曲第5番〈皇帝〉は、名高い作品が次々と生み出された「傑作の森」と呼ばれる創作期の楽曲である。〈皇帝〉という通称は本人がつけたものではないが、この曲のたたえる堂々とした風格は、まさにその名にふさわしい。ベートーヴェンは近代的に改良され音量や音色の幅が飛躍的に向上したピアノを用いて、ドラマティックな作品を次々に創作していったが、ピアノの新たな可能性を十全に生かした本作の大胆かつ豪快な筆運びには、〈運命〉〈田園〉などを書き上げた後の自信もうかがえる。創作ジャンルの的にも協奏曲としては最後の作品となるなど区切りをなしてもいる。

曲はベートーヴェンを経済的に支えてきたルドルフ大公に捧げられているが、当時ウィーンはナポレオン軍に占領され、ベートーヴェンを支援したルドルフ大公ら貴族たちも一時的に街を逃れていた（ピアノ・ソナタ〈告別〉は、これをきっかけに作曲された）。ウィーンにとり残されたベートーヴェンのスケッチ帳には、闘いや勝利に関する言葉が書き込まれている。現実の苦境が創作の糧となるのはベートーヴェンにしばしば見られることだが、これもその一例といえようか。

第1楽章 アレグロ オーケストラがいきなり主和音を強奏すると、ピアノが豪華絢爛なアルペジオを花咲かせる。序奏を即興風に始める意表をついた開始が実に効果的だ。第2主題はヴァイオリンがスタッカートで歌う。

第2楽章 アダージョ・ウン・ポコ・モッソ 第1楽章とは対照的に抑制した美が際立つ。主題を変奏しながら進み、コーダは引き伸ばされた余韻の中から第3楽章のロンドのテーマが徐々に姿を現す。

第3楽章 ロンド アレグロ ロンド主題が第2楽章の静けさを突き破って、爆発的な歓喜を歌う。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1809～10年／初演：1811年11月28日、ライプツィヒ／演奏時間：約38分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ドヴォルザーク

交響曲 第8番 ト長調 作品88

「あいつがゴミ箱に捨てたスケッチだけでも一曲書けそうだ」とは、アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）の卓越したメロディメーカーぶりを称えたブラームスの言葉。ブラームスはいち早くドヴォルザークの才能を認め、ベルリンの出版業者ジムロックに対してドヴォルザークを推薦した。おかげでドヴォルザークは〈スラヴ舞曲集〉で大きな成功を収め、名声をヨーロッパに広めることになる。以来、ジムロックはドヴォルザークと協力関係を続け、作品の出版に尽力した。

ところが、次第に両者の関係に溝が生まれてしまう。売れ行きのよい小品や歌曲を求めるジムロックと、交響曲のような大作に創作のエネルギーを注ぎ込みたいドヴォルザーク。交響曲第7番は〈スラヴ舞曲集〉の続編を書くことを条件にしようじて出版できたが、いよいよ交響曲第8番で両者の思惑は平行線をたどる。「大規模な作品は売れない」と不十分な報酬しか提示できなかったジムロックに対して、すでに作曲家として自信を深めていたドヴォルザークはついに首を縦に振らなかった。売れ筋商品を求める出版社と芸術的な高みを目指す創作者という両者の立場の違いは、なんら現代の事情と変わるものではない。結局、交響曲第8番はイギリスのノヴェロ社から出版されることとなった。かつてこの曲が「イギリス」の愛称と呼ばれていたのは、このような出版事情を反映している。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 哀愁を帯びたチェロの主題で開始される。フルートが楽しげな主題を奏で、熱気に満ちた楽想が展開される。

第2楽章 アダージョ 柔和でひなびた緩徐楽章。木管楽器の小鳥がさえずる。

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ メランコリックなワルツ。

第4楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo 楽天的なファンファーレで開始され、主題と変奏が続く。次々と表情を変えながら、力強いクライマックスを築く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1889年／初演：1890年2月2日、ブラハ／演奏時間：約37分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

レスピーギ
組曲〈鳥〉

イタリアの作曲家、オットリーノ・レスピーギ（1879～1936）は、1919年、作曲家・声楽家のエルザ夫人と結婚した。夫人の回想によれば、当時レスピーギはグレゴリオ聖歌をよく知らず、教えを乞われたという。レスピーギは古楽への関心を深め、この組曲〈鳥〉をはじめ、〈リュートのための古いアリアと舞曲〉や〈グレゴリオ聖歌風協奏曲〉など、古楽に題材を得た器楽曲をいくつも残している。レスピーギは古書収集を何よりの趣味としており、欧州中の古書店を巡って6千冊からなる希書のコレクションを築いたというのだから、音楽に限らず過去の遺産に対する強い関心や憧憬を持っていたにちがいない。

組曲〈鳥〉は全5曲からなり、いずれも17～18世紀の器楽曲を素材としている。

第1曲 前奏曲 古雅な入場の音楽といった趣。原曲はベルナルド・パスキエニの〈3つのアリア〉。めんどりとカッコウが特別出演して、続く「鳥」の音楽を予告する。

第2曲 鳩 オーボエが切なく甘美な旋律を奏でる。原曲はジャック・ガロの作品とされる。私たちが街で見かけるあの図々しい鳩とは別の鳥のような曲想だが、高音で連続するヴァイオリンの特徴的な音型が鳩なのだろうか。

第3曲 めんどり 原曲はラモアの〈めんどり〉。「コッ、コッ、コッ、コッ」と執拗に鳴き続ける。ちなみに「コケッコウ」と鳴くのはおんどりだけ。

第4曲 夜鶯 サヨナキドリ、ナイチンゲールとも。同じレスピーギの〈ローマの松〉など西洋音楽では頻出の鳥だが、あいにく日本には生息しない。原曲は作者不詳の17世紀のヴァージナル曲。

第5曲 カッコウ 原曲はパスキエニの〈かっこうの歌によるトッカータ〉。カラフルなカッコウのさえずりが続く。最後に前奏曲の冒頭主題が帰ってくる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1927年／初演：1927年6月、サンパウロ市立劇場／演奏時間：約18分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ハープ、チェレスタ、弦五部

プロコフィエフ

ヴァイオリン協奏曲 第1番 二長調 作品19

ロシアの作曲家、セルゲイ・プロコフィエフ（1891～1953）は2月革命が勃発した1917年、夏をペトログラード近郊の村で過ごして、集中的に作曲に取り組んだ。この村でプロコフィエフは2年前に着手しながらも作曲を中断していたヴァイオリン協奏曲に取り組んだ。当初は小協奏曲として着手された作品だったが、構想は次第に本格的な協奏曲へと膨らみ、ヴァイオリン協奏曲第1番として完成された。初演は同年に予定されていたものの、10月革命の影響により実現しなかった。革命を受けてプロコフィエフはロシアを離れ、アメリカへと渡る。しかし1923年、アメリカでの活動に行き詰まりを感じたプロコフィエフはパリに移り、ようやく当地でヴァイオリン協奏曲第1番の初演が実現する。フーベルマンら大勢のヴァイオリニストが初演を断ったため、独奏ヴァイオリンはオーケストラのコンサートマスターであったマルセル・ダリユーが務めることになった。批評では「メンデルスゾーン風な面」を揶揄する声がいづつかあったという。

第1楽章 アンダンティーノ ヴィオラのトレモロに続いて「夢見るように」と指示される独奏ヴァイオリンが第1主題を奏でる。第2主題は「語るように」と記され、皮肉とユーモアをにじませる。

第2楽章 スケルツォ、ヴィヴァーチッシモ 中間楽章ながらスケルツォが配置される。信号風の性急な伴奏に乗って、独奏ヴァイオリンが飛び跳ねる。野蛮でけたたましい^{こうしょう}哄笑の声。

第3楽章 モデラート～アレグロ・モデラート ひなびたファゴットに先導され、独奏ヴァイオリンが幻想的な主題を奏でる。チクタクと刻むリズムは時の流れを思わせる。焦燥、詩情、安らぎなど、さまざまな表情を目まぐるしく交錯させ、最後は第1楽章の夢見るような主題を回想して、淡く消失する。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1915～17年／初演：1923年10月18日、パリ／演奏時間：約22分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、チューバ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、タンブリン）、ハープ、弦五部、独奏ヴァイオリン

レーガー

モーツァルトの主題による変奏曲とフーガ 作品 132

「バッハ、ベートーヴェン、ブラームスを熱烈に賛美し、彼らの様式を発展させる」。ドイツの作曲家マックス・レーガー（1873～1916）は自らの創作姿勢についてこう語っている。世紀の変わり目にあって、レーガーはドイツの先人たちから卓越した変奏と対位法の技術を継承し、その偉大な伝統に連なるものとして自らを位置付けた。この〈モーツァルトの主題による変奏曲とフーガ〉をはじめ、〈B-A-C-Hの主題による幻想曲とフーガ〉や〈ベートーヴェンの主題による変奏曲とフーガ〉など、過去の音楽遺産と自作を結び付けた作品も多い。

〈モーツァルトの主題による変奏曲とフーガ〉が書かれたのは第一次世界大戦の勃発を目前にした1914年。主題はモーツァルトのピアノ・ソナタ第11番イ長調〈トルコ行進曲付き〉の第1楽章から取られている。この原曲自体も変奏曲であるが、レーガーはこの主題に8つの変奏とフーガを加えて大規模な管弦楽曲に仕立てている。主題はモーツァルトから採用されているものの、作品から感じるのはむしろブラームスの影響だろう。変奏曲とフーガという趣向は、ブラームスの〈ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ〉を思わせる。また、ゆったりとした木管楽器の合奏により開始される冒頭主題や、金管楽器にトロンボーンを欠いた編成は、同じくブラームスの〈ハイドンの主題による変奏曲〉を連想させる。

主題は原曲と同じくアンダンテ・グラツィオーソと指示され、まずは木管楽器で、続いて弦楽器で提示される。細かな強弱や結尾のリタルダンドなど、表情付けは入念。うららかな第1変奏以降、多彩な変奏が施される。第8変奏は規模が大きく、幻想曲風でロマン的色彩を強める。フーガは長大。第1ヴァイオリンで始まり、次第に厚みを増して威容を築く。最後は、フーガ主題にモーツァルトの原主題が重なって力強く鳴り響く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1914年／初演：1915年1月8日、ヴィースバーデン／演奏時間：約35分
楽器編成／フルート3、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、ハープ、弦五部

格林カ

歌劇〈ルスランとリュドミラ〉序曲

ミハイル・イヴァノヴィチ・格林カ（1804～57）は、19世紀前半に活躍したロシアの作曲家。〈ルスランとリュドミラ〉は彼の2作目のオペラだ。

第1作〈イヴァン・スサーニン（皇帝に捧げし命）〉の成功に気をよくして、新しい歌劇の準備に取り掛かった格林カは、プーシキンの物語詩に目をつける。詩人本人による台本の執筆を希望するも、当のプーシキンが1837年に世を去ってしまう。結局、友人たちの手を借りて、作曲家自ら台本を書き上げた。宮廷合唱団の仕事、家庭内の問題などでオペラの作曲はたびたび中断。完成は1842年まで持ち越した。

初演は同年12月。評判は芳しくなかった。原作が劇的でない上に、台本化の手腕も巧みではない。そのため音楽も全体構成の点で弱くなりがち。ただ、曲のひとつひとつは手が込んでいる。序曲が今なお愛される理由もそこにある。

粗筋は次の通り。キエフ大公の娘リュドミラと騎士ルスランとの結婚披露宴に、小人のチェルノモールが現れ花嫁をさらう。大公は騎士ルスランと参列者の若者たちに、娘を取り戻した者に娘との結婚を許す、と呼びかける。ルスランら3人がリュドミラの救出に向かう。魔法や誘惑を切りぬけ、ルスランがリュドミラを連れ帰り、2人は結ばれる。中世ロシアを舞台にしたおとぎ話である。

序曲は冒頭、長短短（タータタ）のモットーを繰り返しつつせわしなく進む。長短短は古来、英雄を表す韻律だ。続いてヴィオラとチェロの歌うような旋律。長短短の英雄韻律とその他の要素とが抗う部分を経て、冒頭と歌うような旋律とが回歸する。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1837～42年／初演：1842年12月9日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約5分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

10/21
大阪定期

10/24
土曜マチネー

10/25
日曜マチネー

Program Notes

ラフマニノフ

パガニーニの主題による狂詩曲 作品43

ロシアで作曲家としての地歩を固めたのち、革命による政情不安に押し出されるようにして故国を離れたのが、セルゲイ・ラフマニノフ（1873～1943）だ。〈パガニーニの主題による狂詩曲〉を作曲したのは、アメリカに逃れたあとの1934年。スイスのルツェルン湖畔に建てた別荘で書き上げた。

作品はピアノ協奏曲の体裁を取りつつも、中身はテーマと24のヴァリエーションからなる変奏曲。タイトルにある「パガニーニの主題」とは、無伴奏ヴァイオリン曲〈24の奇想曲〉終曲の冒頭旋律を指す。原曲そのものも変奏曲だが、ラフマニノフは同じテーマに、パガニーニとは異なる独自の変奏を加えていく。

ひとつづきに弾く曲ではあるが、大きく4つの部分に分けて考えることができる。まずは序奏から第6変奏まで。短いイントロダクションと第1変奏のあとに主題の提示が来る珍しい構成。変奏の手の内をさまざまに示す。

続く第7変奏から第10変奏までは「ディエス・イレ」を含む部分。「ディエス・イレ」とはグレゴリオ聖歌の「怒りの日」のことで、ラフマニノフはこの聖歌の旋律「ファミファレミドレレ」（階名）をしばしば自作品に引用している。

第3部は第11変奏から第18変奏。幻想的な雰囲気第11変奏のあと、調を変えながら進み、もっとも有名な第18変奏へといたる。この変奏でラフマニノフは、主題を単純化し、さらにそれを上下に鏡写しにした音型を使っている。調も当初のイ短調からもっとも遠くなる。

最後は第19変奏から第24変奏。はじめのイ短調に戻り、音楽が生き生きと動き始める。終曲ではテーマのほか「ディエス・イレ」も回想する。こうしてみると「パガニーニのテーマ」を第1主題、「ディエス・イレ」を第2主題、「調の推移する第3部」を展開部、「はじめのテーマに戻り、聖歌も回想する終結部」を再現部とする、擬似的なソナタ形式をとっていることが分かる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1934年／初演：1934年11月7日、ボルティモア（アメリカ）／演奏時間：約25分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（グロッケンシュピール、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、トライアングル、大太鼓）、ハープ、弦五部、独奏ピアノ

ベートーヴェン

交響曲 第3番 変ホ長調 作品55〈英雄〉

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）は当初、交響曲第3番に革命戦争の英雄ナポレオン・ボナパルトへの献辞を添えていた。共和主義者だった作曲家は、ナポレオンが皇帝に即位した（1804年5月18日）ことを知り、総譜の扉に書いたその献辞をかき消す（同8月）。ただ、ベートーヴェンが8月26日付で出版社に送った手紙には、「交響曲には本当はボナパルトという題がつけられている」との記述が残る。特定の人物を想定しているが、音楽自体がナポレオンの具体的な容姿や生き方を描写しているわけではない。

非公開や半公開の試演ののち、05年に公開初演。当時の批評は半公開試演の様子を次のように伝える。「（第3交響曲には）どぎつさや奇抜さが余りにもしばしば見られ、そのことによって見通しが極めて難しくなり、統一がほとんど失われている」（『一般音楽新聞』05年2月13日号）

散々な書かれようだが、そこからは逆に、ベートーヴェンがこの作品で従来の交響曲の概念をひっくり返してしまったことが分かる。演奏会では「大変な喝采を受けた」という記録も残されており、耳新しさを喜んだ聴衆もいた。

第1楽章、延々と続くヘミオラ（たとえば4分の3拍子の2小節を2分の3拍子とみなす拍節変化）には演奏者ですら参ったとの報告が残る。作曲家の弟子リースは、再現部直前、弦楽に主題が回帰する数小節前にホルンがフライングする場面を、ベートーヴェンの「意地悪」として回想している。**第2楽章**は短短短長のリズム（タタタ ター）が耳を引く葬送行進曲。中間部では伴奏を舞曲ジーク風の長短リズムに衣替えさせて推進力を保つ。**第3楽章**のスケルツォでは名前の通り「冗談」めいた楽想が続く。速過ぎる3拍子が聴き手の拍節感をかき乱す。バレエ音楽〈プロメテウスの創造物〉の終曲を転用した変奏曲仕立ての**第4楽章**も興味深い構成。低音のテーマだけを示したあと、さまざまな横顔の変奏を続ける。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1803～04年／初演：1805年4月7日、アン・デア・ウィーン劇場、ウィーン／演奏時間：約47分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦五部

10/21
大阪定期

10/24
土曜マチネー

10/25
日曜マチネー

Program Notes